麑嶋實記一夕話

二号

別府新吹

西郷隆盛

岩板人日本橋通二

大倉孫兵衛

A6660
2

明治十年

管内

金壹圓

軍務所

六月發行

通貨

賊徒ノ發行セシ
金札ノ写シ也
金巾ヲ以テ合
タルモノニテ

は五六〇

此札ヲ以テ諸上納ニ
相用ヒ不苦者也

通用三ヶ年限

十錢二十錢一円
五円十円二十円
ノ六種ニシテ皆
青色ナリ

48-7917

既はして夜へ殆ど明ようと
残月光を失ふ
及んで
官軍
山岩寺
谷の周囲ふ集
合し共ふ山上の
要據とろ山下の
賊を拳下りに打
悩し岩寺谷の
谷間る一孤の賊
塁へ追ひあろ

西郷隆盛

桐野利秋

斯て
官軍
賊兵
と
全く岩
寺谷

次へ

山野田市輔
別府新助
桂四郎
村田新八
取まき
新集
院の方
面する谷少将の
高城十次

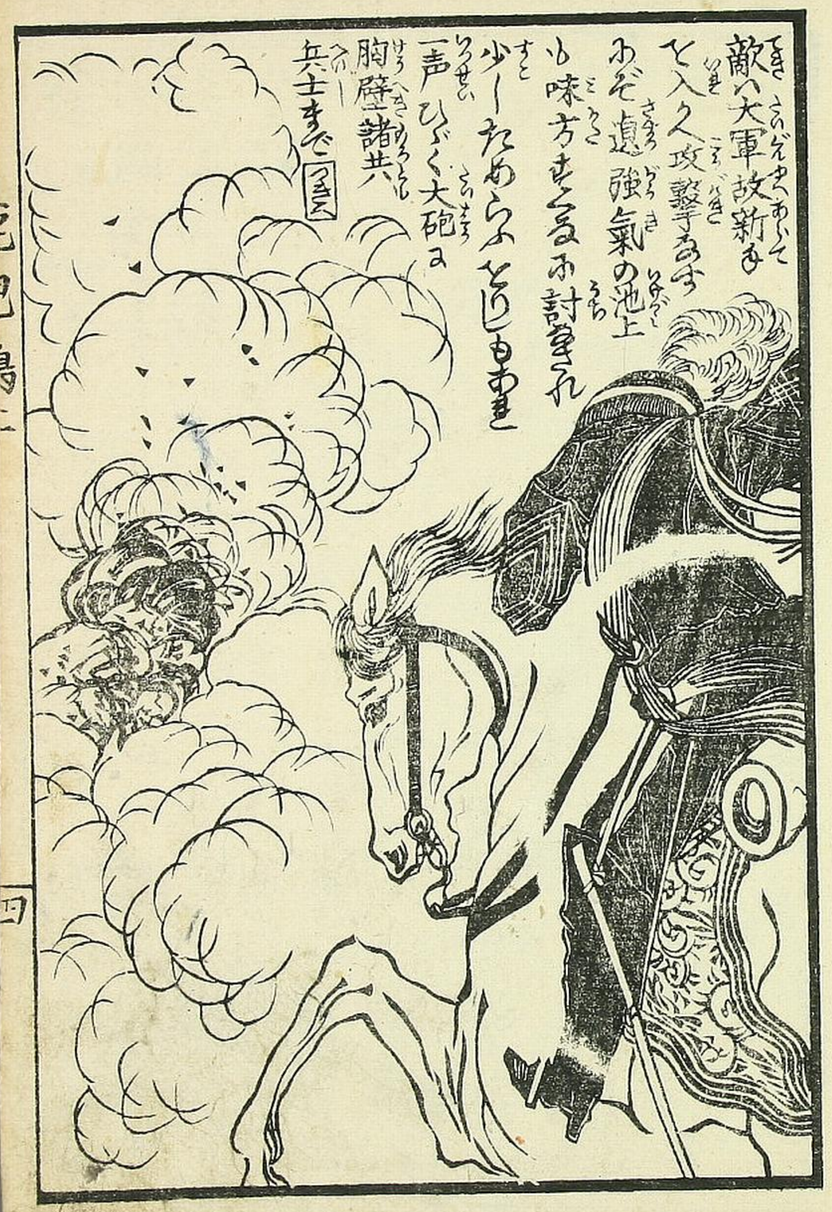
鎮撫兵と
共ふ別働第
一旅團ハ岩崎
谷の山奥ふる樹
林
蒲生彦四郎
逸見十郎太
の間
をよぢのぼり
いぶつ
枯木
の次へ
池上四郎
山名本平八
平野正助

嫌ひなく起く進入
遥ら向ひと望見ゑば賊徒
の住居し洞屈とあれども
の救ケ処あり去ども
人跡あらざれば
若し穴中ハ
隠るる哉と筒
先そろへて五六発
射込てんれど応ずるの色さへ
進めと諸共ハ勇進で山望より賊塁
目的て乱発し漸次に進撃ゑば
賊軍い巣穴ハ敵の寄るとなるより

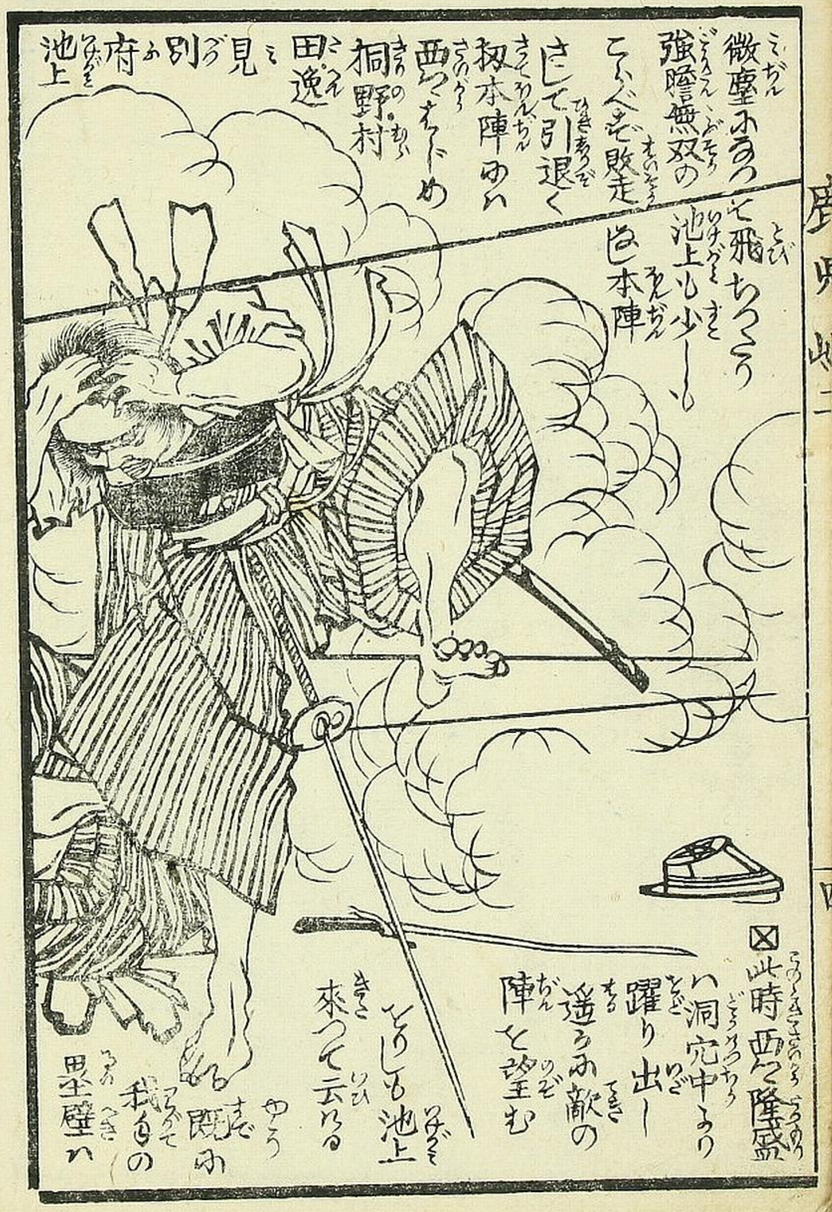
皆一齊ハ乱発ら少しもとゞ
薩ア武士烟の下より切て出必死と
究めて大奮戦ゑすとなるより別働第一
旅團皆抜つまて切込んだり敵と
頭る池上四郎偽り負て退ども
旅團い得たりと突進ゑす
矢ごろハ」と賊軍ハ一声ひ
く馬上炮と共ハ取て立て
乱発ゑす此勢ひハ官兵ハ
少し退ひるが
山の半途ハ
ひくなる▲

▲二の手の大佐ゲ号令ハ
ウテーと叫ぶ
言下ら山を
抜ろと詰ク
弾丸を一ぱす
射出す煙りのうちに
鹿児島勢二三十人

討死をせべ池上らうて踊り出何ぞ
是ホの筒先ホの玉を取るハ三甲悲(匹)一歩も
退くとあられいぞ敵味方の目を覚させんと
覚への業物抜ゐ[illegible]前後左右へ切まろり
秘術を尽す激戦ホ従ふ兵も隊長の
如此の働きホ何ゐ以て猶豫へき
我劣らじと奮戦ゐし火水ホ
たつて戦ひゐ思壁
中の賊兵ハ
勢力限り
つめゐく連
発ゐすされ共

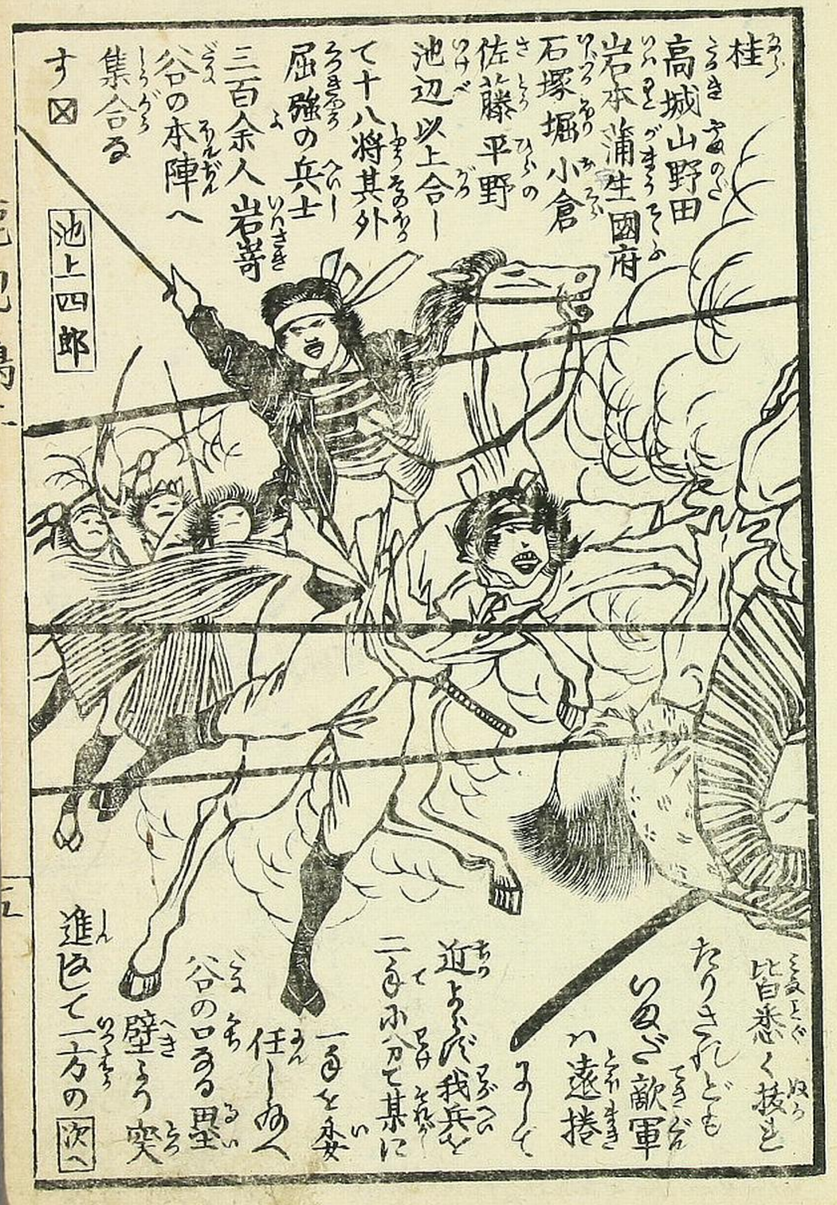


微塵に成つて飛ちらう
強膽無双の
こゝぐさ敗走
池上も少し
邑本陣
さして引退く
叔本陣ゆい
西つたゝめ
洞野村
田逸
見
別
府
池上



☒此時西の隆盛
い洞穴中より
躍り出し
遥ふ敵の
陣を望む
とりしも池上
來つて云る
既ふ
我身の
黒壁い

桂
高城山野田
岩本浦生國府
石塚堀小倉
佐藤平野
池辺以上合
て十八將其外
屈強の兵士
三百余人岩寺
谷の本陣へ
集合る
す☒



池上四郎

皆悉く技を
たりされども
いなご敵軍
い遠捲
すして
近ちに我兵を
二手ふ分て某に
一手を委
任しぬ
谷の口なる黒
壁うう突
進ぜて一方の
次へ

血路を開き中すべ

▲先生桐野

両将い

なも此道ろう囲をを

のがを後

日又来ゆる

あり

つふ

▼べーと頻りふせいて進むれど西々更ふ聞入ず左右へ首を打ふりて貴殿方の知らるべく

⊕

図一ト先此場と脱ぬくとふひ入てぐやれば辺見別府と始めとして此議最も然る

⊕そも此戦鬪を発ーろるや

次へ

大義名分を
思ひ毫も我が
邪志を入るゝ
▲國を愛するの
極こゝろ出発して王師に
抗するゆあらばと事り

我れ短才
※
※不幸
にして朝敵
賊徒の汚
名を蒙る是
事と発し
我が至らざる所あり
而して各方と盟約を結び
そこで
たるい
※二月昔ゆとじめ
て戦ひを肥後に開き
あり今日に至る迄三百十
有六日連戦殆と空
して劇戦苦闘
以て官軍に當るも
各々方の尽力に仍
てあり而て薩肥
日隅四州の人民を
悩ます更幾許
事を不知故に
今日奥敗に

至る迄実に天の然らしむる処なり且つ
去る八月十七日向延岡を棄て辛辛方
苦しゝて本月一日突然再度此城山に
来襲し来る迄各方に約せしごく
倶に生地に帰着して討死做の覚悟なれば
何所ぞ大丈夫の士今日の大敗に至りて一方の
血路を開き
脱走して
惜まぬ
生
を保ちて各
方との約に

西郷隆盛

図 胸壁に
よる官
兵目がけ
て突出し
一声叫ぶ
声
あり
共に口
を揃へて
砲
発
する

烟りの下
より切込
隊我を
劣と
突進
勢
威猛虎の
如く
乱るゝ
是を囲む官軍い
新撰旅団の攻撃
兵合囲を守る図

安村中尉

図 何の自面ありて
再び吏を為んや必ず
未練の語を聞て後来
大丈夫の名を汚しなきを諸
共に花と散て決戦を最後と
▲桐野を始め
諸将とも一同に泪
を流しかく先生の
決心なれば上は何人の
為に未練と云んやさぞかく決戦
を見て冥土の供仕つらんと皆一同に
勇ゝ立岩寄谷の入口まで 図

伏見少將其外手に屬する安村中佐
今刀折り烈敷号令を發し周囲の兵士
少る臆まず勇し進んで乱発
▲中あち例の抜刀隊我も
劣らじと切込こう火花と
散して戦いつう双方より射
出す砲玉いかくれの如く
黒烟天に漲り火光い
天を焦し晴天変じて
霧中の如し
▲安村いかうて大音あげ賊へ僅の
小勢なるぞ一個も洩さず討取べと
自の賊中に突と入り西々目がけて
討ん(こう)(西々と)
西々なるう微笑ひあるべき敵
▲振あひうる目に物見せん
と勝太刀ふう上真向未
塵と切下る心得うと
安村氏受流しつ切欠
こう。以下三号へづく

東京繁栄大図 八色入
開明東京新図銅鐫
開明皇國新図 日
小学教授書數種
錦絵畫帖多
文人画図多
彩板 大黒経画志ゐく
日本地誌畧輕多箱入
日本史畧輕多 日
小學單語輕多 日
和英對譯輕多 日
近世英雄輕多 日
書語録数種
千代紙多しれく
絵本帖多数志ゐく

万 和漢書籍 東錦繪 問屋
東京第一大區六小区
日本橋通壹丁目十九番地
大倉孫兵衛

010190507977